竹千代賞

多様性と悪の境界線

甲賀愛実

アイドルだけど周りに媚びない、クールでかっこいい、私の大好きな「推し」。
「素の自分で生きていこうぜ。偽らなくても認めてくれる人はきっといる。」
「本当の自分を晒すことを恐れなくて良い」
「周りに囚われないで、自分らしくすればいい」
そんなことを言っていた彼が炎上した。いつものように学校から帰ってきて推しのツイッターを開く。
「え。」
とても長い文章がツイートされていた。過去に見たことがないほど多いリツイート件数に、普段より多いコメント数。いつも、イベントの宣伝やその日にあったことを短文でつぶやくだけの彼らしくない。何だろうという好奇心と共に胸騒ぎがして、貪るようにその文章を読み始めた。
「今回はどうしても伝えたいことがあります。これはネタじゃなくて、普段から伝えたいと思っていたことです。実は、俺はトランスジェンダーです。今までそのことを隠して活動してきました。お前らには自分を偽

るなとか言っていたのに、今まで俺はお前らにだけじゃなくて自分自身さえも偽って生きてきました。でも完全に女になりたいわけじゃなくて、男の部分もあるかなと思うし、自分でも自分がどうなりたいのかわからなくて、でも騙し続けるのもつらいと思い公表することにしました。」

好奇心や期待は一行目を読んですぐに不安に変わった。敬語のツイートなんて初めてじゃないか。何かあったのか。まさか活動休止？　そんなことがコンマ何秒という短時間で頭をよぎる。しかし私の予想は想像もしていなかった方向に裏切られ、読んでいるうちに呼吸が荒くなっていった。感情をコップに例えるならば、驚きという感情がまず流れ込んできて、空いている隙間に同情、そしてかすかに、ほんのかすかにだが、悲しみ、怒りが数滴垂らされたようだった。こんなにいろいろな感情が次々に通り過ぎたのは初めてのことだったかもしれない。

現代社会は、ジェンダーのことに関して敏感だ。学校では多様性を認めようという教育を受けてきた。だから軽々しく「同情する」なんて、「騙されていた、ひどい」なんて、言ってはいけないと思った。

しかしそれでも、今まであなたの言葉に励まされて生きてきたのに、という言いようのない悲しみや怒りを感じてしまった。もちろん、推しがトランスジェンダーだったことへの頭を殴られたかのような衝撃と、今まで苦しかったのだろうなという心の痛みが大きく、自分でも気付かないほど朧げにではあったのだが。

私はこれまで、自分が怖くて言えないことを言葉にしてくれる「推し」に縋って、依存して、生きてきた。私は同級生が好きなアニメや漫画にあまり興味が持てず、休み時間は一人で本を読んでいることが多かった。でも「これが私だ！」などと割り切ることはできず、かと言ってクラスに馴染むこともできなかったから、この人が言っていることは正しい、私は間違っていない、と思うことで自分を守ってきたと言っても良いだろう。

自分を支えてくれていた推しの言葉が心からのものではなかったと知り、立っている地面が抜けたかのようだった。

他のみんなは、他のファンの人たちはどう思ったのだろうか。ツイートされた文章を繰り返し読んだ後、ほ

とんど無意識にコメント欄を開いていた。いや、現実を受け止められなくて、文字を目で追っていないと怖かっただけかもしれない。

「今まで辛かったですよね。伝えてくれてありがとうございます。」

「正直驚いていますが、いつまでもあなたについていきます。応援しています」

勇気ある公表に対する好意的なコメントが多くあったが、それ以上に目立ったのは批判的なコメントの数々だった。

「今は多様性の時代なのだから、最初から言ってくれていればよかったのに」

「今までのありのままで生きろっていう言葉は嘘だったの？」

「トランスジェンダーであることは批判しないけど、あの活動方針でそれを隠していたのはちょっとショック」

批判的とまでは言わなくても、好意的ではないコメントが六割ほどを占めていたように思う。中には過激なものもあった。ＬＧＢＴという繊細な話題に対して批判的なコメントが数多く集まっていることが衝撃だった。多くのコメントは、トランスジェンダーであること自体への批判ではなく、そのことを隠していたことに対しての批判だった。隠して活動していただけなら良かったのかもしれないが、口癖のように「ありのままの自分で生きていこう」と言っていたから、裏切られたと感じた人が多かったようだ。

その数分前まで自分も少しは批判的な感情を抱いていたことなど忘れて、「1番苦しんできたのは彼なのに！」と憤慨した。今まで打ち明けられずに活動してきたことがどれほど苦しかったか、私達には想像もできないはずなのに、軽々しく発言している人々に怒りを覚えた。

推しを応援する言葉や好意的な言葉に溢れていたコメント欄が、悪意あるコメントに埋め尽くされる。推しが炎上したのは初めてのことで、「これが炎上か」と実感がわかないままぼーっとその公表について考えていた。考えていたと言っても、頭の中を今までの推しの言葉と公表ツイートがぐるぐる回っていただけだったが。

自分の感情を処理するのに精いっぱいで、「彼女」がそれらのコメントでどれだけ傷ついたか、私は想像できなかった。いや、想像できているつもりになっていた。苦しいだろうけど、それを覚悟して公表したのだろうし、活動は今まで通り続けていくのだろうと考えていたのだ。

しかし、それは甘かった。ジェンダーのことで苦悩しているのにも関わらず、さらにファンからもバッシングを受けることの苦しさを軽く考えていた。彼女は約一週間後に、活動を休止すると発表したのだ。具体的には語られなかったが、おそらくバッシングと炎上を苦にしてのことだろう。

なぜ私の推しは炎上しなければならなかったのか。勇気を出して公表したら、活動休止にまで追い詰められるほどのバッシングを浴びるなんて、酷すぎる。

芸能人が同性愛者であることを公表しても積極的に受け入れられる現代で、私の推しが炎上した理由は何なのか。私はそのことをずっと考え続けていたが、やがて一つの結論に達した。

それは、多様性と悪の線引きだ。トランスジェンダーであること、同性愛者であることは多様性の一つ。しかし、「嘘をついて、トランスジェンダーだというのを隠すこと」は悪、という線引きである。

「言うのが怖いから隠す」というのも多様性の一つだと私は思う。しかし多くの人はそれは多様性だと認めなかったということだろう。ここまでは多様性、でもここから先は多様性ではなく悪、と決めつけ、境界線を設けている人がたくさんいるのだ。

差別や偏見、無理解などの苦しみはまだまだあるとはいえ、「セクシャルマイノリティなどの多様性を認める」という考え方が普及するにつれ、ＬＧＢＴの人達は生きやすくなってきている。しかし、多くの人が「多様性」という言葉を聞くと「ＬＧＢＴ」「トランスジェンダー」「同性愛」「ゲイ」などという言葉を思い浮かべるように、多様性が認められてきているとは言っても、それは限定的だと思う。

多様性の本質は、自分と異なる価値観や生き方の人を認めることである。それはジェンダーについてであったり、宗教についてであったりするが、もっと小さなことについても言えるはずだ。

好きなもの。嫌いなもの。怖いもの。住んでいる場所。日常的な習慣。自分が理解できないものが好きな人、自分にとっては全く怖くないことが怖い人、色々な人が世の中にはいる。

「え、そんなものが好きなの？」

「そんなことが怖いなんておかしいね」

「頭いいのにわざわざその職業を選ぶなんて変だよ」

誰もが一度は似たようなことを言ったことがあるのではないだろうか。では、これらは多様性を認めていないことにはならないのか。ジェンダーという繊細な話題でなければ軽々しく、無分別に人を否定してもいいのか。そんなことはないはずだ。

多様性がもてはやされる現代だが、多様性とはなんなのかをもう一度考えてみるべきだ。ジェンダー、宗教といった大きくてわかりやすいことに対する「多様性」を認めるだけでは本当に誰もが生きやすい社会にはならないはずだ。

たとえ、さまざまなジェンダーのあり方を認め「多様性は大切だ」と言っていたとしても、軽々しく誰かを否定する人は、本当の意味で多様性を認めているとは言えないだろう。

一方で、例えばだが、「地震大好き」「犯罪をしてみたい」などと言うのは、多様性が認められてるからといって許されることかと言えば、そんなことはない。「多様性」という言葉はふわふわとしていて曖昧だなと思う。自分勝手に境界線を引けば、そもそも多様性を認めていないことになってしまうし、境界線を引かなければ、どこまでも「多様性」と言う言葉を武器に許されることになってしまう。

推しの炎上、そして活動休止で、私は心に決めたことがある。それは誰かを批判する前に、その批判は自分の勝手な「これは悪だ」という決めつけによるものではないか考えるということだ。「多様性と悪の線引き」で誰かを傷つけてはいけないと強く感じた。

簡単なことのように思えるが、私自身も、彼女の公表に対して少しとはいえマイナスの感情を抱いてしまっ

た。もしも、みんながみんな好意的なコメントだったら、行き場のない思いを批判コメントという形でツイートしてしまっていたかもしれない。

「隠していた」ことは悪ではなく多様性の一つだと思うし、彼女は悪くないと思う。しかし、だからと言って彼女の公表をプラスの感情のみで受け入れられたとは、やはり言えない。

多様性を認めていきたいとは思っても、「多様性を認めているとは言えない感情」が浮かんでくることはあるだろう。しかし、大切なのは考えなしに批判を言葉にするかどうかではないか。たとえ、悪くない誰かに批判的なことを思ってしまったとしても、口に出さない、言葉にしないという行動をとったのならば、多様性を尊重している、多様性を認めているということだと私は思う。

私の推しのように傷つく人がいない社会を作るために、「多様性と悪の身勝手な線引き」は絶対にしない。してはいけない。一人一人がこう思って生きていけば、きっと優しい社会になっていくはずだ。